〔漆工芸の美展によせて〕

銅板地螺鈿花鳥文説相箱と蒔絵籬菊文机

当館の漆工品コレクションの中には重要文化財に指定されている作品が3点ありますが、ここではそのうちの2点を紹介します。

『銅板地螺鈿花鳥文説相箱』(図1)は、平安時代の「説相箱」の名品で、加賀藩の前田家に伝来したものです。(高さ7.0センチ、縦26.0センチ、横30.0センチ)。

「説相箱」とは、「居(据)箱」「接僧函」「三衣筥」ともいい、仏前での法会を修する際に用いる三衣(僧侶が身に着ける三つの衣。袈裟のこと)、法具、差定(式の次第順序を書いたもの) などを納めて導師の左脇机に置かれるもので、平安時代後期からの遺例があります。形態は床脚付の長方形の浅箱で、木胎に金銅板を装し、そこに花鳥文などの装飾が施されています。

当館の『説相箱』は、四方角にゆるい丸味をもたせた方形に近い長方形の箱です。通例の如く蓋は付随しておりません。本体部は桧材製で、内側は黒漆塗り、身の外装には約1ミリの銅板地に宝相華風の花樹とインコのような小鳥を配した螺鈿文様が象嵌されています。それぞれの螺鈿には細かい毛彫りが施され華やかで生彩のある表現となっています。身の口縁部には銅製鍍金の置口が施されています。身を支える台座四方は、それぞれ金銅の覆輪をつけた三個の格狭間を透し、各格狭間の間には、螺鈿の宝相華文が配されています。本品はその希有の技法とともに、類品中もっとも古様を示す説相箱の優品です。

『蒔絵籬菊文机』(図2)は、机の天板に蒔絵技法によって菊花に柴垣や籬、岩や土坡が典雅に表されています。(高さ27.0センチ、縦38.5センチ、横102.5センチ)。

このような柴垣や籬は、次の桃山時代になると完全に除かれて、秋草のみが豪快に描かれるようになりますが、それを「高台寺蒔絵」(京都・高台寺に伝わる秀吉、高台院ゆかりの遺品の蒔絵を総称) といいます。本品の天板側面や両端の筆返しの部分、脚部に散らされた蒔絵の桐文様は、「高台寺蒔絵」によく見られます。従って本品は、そのような文様の面においても、また技法的にも、室町末期から桃山初期の「高台寺蒔絵」への過度的な要素をもっているといえます。平蒔絵、梨子地、針描きなどの新技法と、高蒔絵、金貝、厚梨子地などの古典的な技法が合わせて用いられているところに特色があります。 (林進)

図1 銅板地螺鈿花鳥文説相箱 平安時代

図2 蒔絵籬菊文机 室町時代

〔書の美展によせて〕

高松宮好仁親王書状 角倉与一宛

当館には、日本書誌学の故中村直勝博士によって蒐集された古文書644件がありますが、今回その中から、近世初期の京都の町衆、角倉与一(別号は素庵)に宛てた高松宮好仁親王の『書状』(一幅、紙本墨書、縦36.0センチ、横53.7センチ)を紹介します。

〔釈文〕

只今者、致伺公、得尊意
辱奉存候、然者、此鶉五
乍軽少、鷹之鳥とて人の
くれ申候ま、進上申候、大和田へ
参候刻故、書中不具候、
かしく

極月廿五日

〔ウワ書〕「(封)角与殿まいる 好仁」

高松宮好仁親王(慶長八年〜寛永十五年・1603〜38)は後陽成天皇の第七皇子、生母は女御の中和門院・近衛前子(寛永七年没)でありますから、後水尾天皇(慶長元年生)、近衛信尋(慶長四年生)、一条兼遐(慶長十年生)とは同腹の兄弟であります。御兄弟たちはこぞって学芸に熱心で、好仁親王は和歌や数奇を嗜み、また能筆でありました。

この書状の宛名の「角与」は、角倉与一(1571〜1632)の略であります。内容は「ただ今はお伺いしまして、尊意を承りましたこと辱く存じます。ついてはこの鶉五羽、軽少ではありますが鷹の獲物だからと人から貰いましたので進上いたします。大和田(山城国宇治郡五ケ庄大和田にある中和門院の御所)へ参る時刻になりましたので、簡略な書面で失礼します」ということです。与一へのお礼状です。

角倉与一は安南国貿易を行い、また高瀬川運河を開いた事業家であり、一方、藤原惺窩門の儒学者であり、三条西実隆の流れを汲む古典学者でもありました。また和歌や書法を嗜む教養人でありました。角倉家は富裕な町衆として経済面で禁裏と深く関わっておりましたので、与一が好仁親王に近づきを得ているのは当然のことでありましょう。親王から差し出されたこの書状が町人宛てのものとしては文面が丁寧であり、また町人に品物を進上している事実から、親王と与一との関係がたいへん親密であったことが推察されます。

大和田の御所が造営されたのは元和九年(1623)、中和門院が亡くなるのは寛永七年、与一が隠居するのは寛永四年でありますので、この書状は寛永初年ごろ、好仁親王の二十二、三歳のころのものと考えられます。 (林進)

高松宮好仁親王書状 角倉与一宛

季刊 美のたより No.133
平成13年1月5日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.